

アパルトヘイトの文学（2）

－ Dennis Brutus、詩と exile の悲哀 －

赤 岩 隆

要旨：前回に続き、アパルトヘイトの文学について考察する。今回は、詩について、とりわけ Dennis Brutus に着目しながら、exile と詩、exile 特有の悲哀が詩人をいかに苦しめ、また、詩人がそれにいかに抗ったか、詩人の活動家としての側面とも絡めながら論じてゆく。

1

アパルトヘイトのお陰で生まれた文学を考えるのに、今回は、アラン・ペイトンを俎上に載せ、特に（長篇）小説の面から論じたが、今回は詩について考えたいと思う。取り上げるのは、デニス・ブルータス（Dennis Brutus, 1924-2009）及びその作品である。数多詩人のいるなか、なにゆえブルータスなのかと問われれば、ペイトンの場合のようにはっきりと応えられそうにないが、ひとつには、文学史的にみて、ブルータスが南アフリカを代表する詩人のひとりとして一般に見做されていること。また、ひとつには、アパルトヘイトのもと、多数の文学者や芸術家が取らざるを得なかった亡命者（exile）の道を、ある意味、きわめて有意義に辿ってみせた人物であるという点。これらふたつが、デニス・ブルータスを取り上げる主な理由である。といて、1966年という早い時期に国外に去ったブルータスが、その後も長く続く、そして、いよいよ熾烈を極める闘争の全状況を洩れなく代表しているとは思えないから、必然的に欠け落ちる部分については、稿を改め論じる必要があるだろう。

詩人にして活動家、あるいは、活動家にして詩人。卵が先か鶏が先かといったアイデンティティの混乱は、闘争下に身を置く文学者や芸術家を問う際につねに従って廻るジレンマのようなものだが、それ以上に、その人物の業績をなにより芸術内容の集積としてみるか、はたまた、闘争をめぐる活動内容のそれとしてみるかの違いは、じつに、評価の全体に通じることにもなってしまう。現実の次元においては可能な一人二役が、評価の次元においては互いに足を引っ張り合うわけだが、本稿のタイトルに挙げた「悲哀」というのも、まさにこの悲劇的な状況を指している。これもまた、いわゆるアパルトヘイトの文学の逃れられない宿命のひとつと見做せそうだが、今回は、詩人デニス・ブルータスの業績をもとに、そうした悲哀の具体的様相を辿ってゆこうと思う。

2

1924年生まれのブルータスは、1918年生まれのネルソン・マンデラの6つ下、前回取り上げたアラン・ペイトンと比べると、21歳下になる。したがって、国民党が選挙に勝利し政権を握る1948年の時点で言えば、マンデラ30歳、ペイトン45歳に対して、ブルータス24歳と

いった具合だが、当然のことながら、年齢の違いは世代の違いを意味し、世代の違いは、闘争に対する関与の仕方に大きな違いをもたらすことになる。1948年という年をひとつの基準としてよいなら、その時点で24歳だったブルータスは、マンデラ同様闘争の第一世代ということになるのだろうが、うえて指摘したように、南アフリカにおける詩人の代表＝ブルータスとするやり方にもしも限界があるとしたら、ひとつには、そうした第一世代が共通して抱え持つ限界に多くは重複するものとみてよいだろう。すなわち、ブルータスが exile となる1966年という年は、詩人にとってきわめて重要な年ただけでなく、じっさいにはそれ以上に、闘争の世代的な推移を指し示すひとつの指標と見做すべきものと云ってよいだろう。ようするに、それは、けっして偶然選ばれた年号などではなく、闘争全体のひとつの世代的な限界、ひとつの転回点を意味していたということなのだが、もちろん、同時にそれは、ブルータスの詩人（活動家）としてのそれをも含み込むだろうから、本稿における議論も、そうした見方に従うことになる。

それによれば、詩人デニス・ブルータスが遺した詩集群は、1966年という年を境にして、前後で大まかなふたつのグループを形成しているものとみることができる。具体的に詩集名を挙げて示せば、1966年以前のものとしては、*Sirens Knuckles Boots* (1963) と *Letters to Martha and Other Poems from a South African Prison* (1968) の二作品、それ以後のものとしては、*A Simple Lust* (1973) 及び *Stubborn Hope* (1978) の二詩集に含まれている作品群ということになるが、そのようにふたつに分断されるのは、けっして好んで求めた結果ではなかった。そのことを忘れないでおこう。ちなみに、1966年の時点のブルータスは、42歳。疾うに結婚もし子どもも生まれていた。

3

具体的な作品について論じるまえに、ブルータスの活動家としての側面についてまとめておこう。活動家ブルータスということであれば、その点まっさきに触れなければならないのは、いうまでもなく、ブルータスが世界に訴え南アフリカをオリンピックに出られないように追い込んだその一事に尽きるだろう。誰もがたかがスポーツと闘争の埒外に置いていたオリンピック（スポーツ）に目を付け、結果、アパルトヘイトという国内問題を否認もなく国際問題へと格上げさせた。と同時に、アパルトヘイトの持つ意外なアキレス腱のひとつを覆い隠しようのないような形で露わにした。その功績は、じっさい、計り知れないと形容してよいような類のものである。のちにスティーヴ・ビコが南アフリカ国内で果たすような大きな仕事を、ブルータスは、スポーツを通じて、国外＝国際舞台で成し遂げた。そう云っても過言ではないだろう。

フォート・ヘアを成績優秀で卒業したブルータスは、いかにも闘争の第一世代らしく、国民党が政権を奪取する1948年に高校教師となって活動の第一歩を踏み出した。国民党政権は、50年代を通じて、念願のアパルトヘイト政策を実現させるための法律を矢継ぎ早に成立させていったが、それに呼応し反アパルトヘイト運動も活発化していった。そのなかには、当然、若い高校教師デニス・ブルータスの姿も認められたわけだが、そうした互いに一步も譲らぬ対立関係は、やがてひとつの頂点を迎え、1960年の3月、ジョハネズバーグ郊外のシャープビルで大規模な虐殺事件が起きる。それに抗議する暴動が国中を揺るがすなか、国民党政権は非常事態を宣言し、そのいっぽうで、多数を検挙拘留し、主謀者と見做された ANC 及び PAC

を活動禁止処分に付した。事件を重くみた国連安保理は、対応を非難する決議を出すか、政権は意に介さず、それどころか、続く 60 年代を通じて、理不尽極まりないやり方で国内の反対運動を抑え込むためのさらなる法律を次々通過させてゆく。闘争の側は、それまでの非暴力から一転して激しく暴力化してゆくものの、最終的にイギリスの支配を脱し共和国となった政権の側の優位は揺らぐことなく、結果、多くの活動家が exile の道を選ばざるを得なくなり、そのなかのひとりにデニス・ブルータスも含まれていた。本稿はこれをもって闘争の第一段階の結末と見做すが、それについては、ブルータスが exile となる 1966 年の 2 年後の 68 年にはすでに、次代の闘争の主演となる SASO が結成されるのをみても容易に納得できるはずである。

ブルータスが当初より闘争の有力な結節点となり得るもののひとつとしてスポーツに着目したことと、彼が高校教師の職に就いたことは、むろん無縁ではなかった。ほかでもない、高校の運動クラブにおいては、その活動の一環として対外試合を組むことがあるが、その際人種が問題となって支障を来すことが儘あったからである。いうまでもなく、フェアプレイの精神こそはスポーツの真髄である。なら、スポーツにおける人種の差別とは、それに対する明らかな違反ということになるだろう。そうしたごく単純な事実を、国際舞台でブルータスは執拗に問題化してみせたのだが、これが思った以上の効力を発揮したのは、この際疑われているのが、南アフリカ国内におけるスポーツ精神の有り様というよりも、それを放置し顧みようともしない世界のフェアプレイ精神のほうだったからである。いまさら確認するまでもなく、フェアプレイの精神を欠いたスポーツとは、野蛮な遊戯以外のなにものでもない。くわえて、どんなスポーツも、単なる記録の集積という以上に、国家（民族）的誇りの発露、さまざまな伝説の集合場所といった付加価値を保証する役割を担っている。となれば、そんなにも大切なものを犠牲にしてまで、たかだかアフリカ大陸南端の一国の政治的気紛れに付き合わされる謂れは毛頭ない、そう世界が考えたとしても少しも不思議ではないだろう。じっさい、ブルータスらの運動の結果、南アフリカは、いとも容易くあらゆる国際スポーツの現場から排除されることになった。

そうした仕打ちに対して国民党政権が取ったのは、頑固なまでの拒否の姿勢だった。南アフリカにおいても、スポーツの担う国家（民族）的誇りや伝説願望は、負けずに強かったはずである。にもかかわらず、あえて排除に甘んじたのは、アパルトヘイトという、遙かに貴重な守るべき国家（民族）的誇りと伝説願望があったからであり、それに身も心も捧げ切っていた結果にほかならない。とするなら、行き着く先は、衝突のさらなる激化しかないことになるだろうし、じっさい、歴史はそうように展開してゆく。とするなら、ブルータスらの運動の限界もここにあってよみよめよう。すなわち、ブルータスらの運動は、スポーツを通じてアパルトヘイトの問題をことさら国際化することまではできたが、さらに進んでその息の根を止めるところまではゆけなかった。それどころか、逆に政権が頑なにうちへと閉じ籠るような事態を招いてしまった。国際的排除を拒否したゆえに棄てざるを得なかったものが大きければ大きいほど、抱く恨みが深くなるのは道理だろうから、それを思えば、ブルータスらの運動は、皮肉にも火に油を注ぐ結果になってしまったと云えないこともない。人種差別の根とは、そんなにも深いものだと云ってしまえばそれまでだが、他方において、文学は、それでこそ豊かさを増すと云った天邪鬼を本性とする。その詳細を読むことこそ、じっさい、アパルトヘイトの文学を読むことにほかならないと云えるほどなのだが。

4

ブルータスが詩に魅せられたのは早く、高校時代にまで遡る。その意味では、活動よりも詩のほうが時間的に先だったわけだが、詩作の試みは、同様に教師だった母親からの影響もあり、とりあえずは英国式の抒情詩を模範とした。その姿勢がごく一般的な反対活動からより本格的な闘争へと巻き込まれてゆく過程において変貌を遂げ、最初の詩集に含まれる詩作品となって結実した。この傾向は、次の第二詩集にも引き継がれ、そして、1966年という断絶の時が巡ってくる。断絶である以上、それ以後の変貌は、それまでのそれとは、根本的に性質を異にしている当然だが、その事実以後ブルータスは苦しめられることになる。本稿の云う「exileの悲哀」とは、じっさい、そうした事態を指して使われているのだが、exileの道が自ら好んで選んだ道でない以上、詩人が舐める苦悩とは、あからさまに云ってしまえば、しなくてもよい経験だったに違いない。にもかかわらず、理不尽にも、詩人はその全責任を生涯を通じて取らされることになる。じつに哀しい不幸と云うほかないが、とはいうものの、先に述べたように、芸術とはそうしたときにこそ本領を発揮するはずのものなのだが、なにゆえ、アパルトヘイトを直接相手にする闘争においてうまくいったものが、exileという立場においては十分機能しなかったのか。理由はいくつか考えられるが、ひとつには、exileという立場それ自体の消極性、それが挙げられるだろう。くわえて、それでいながら、exileとなったのちも、適うことなら、あたかも南アフリカ国内にいるかのように闘争を続けたいと無理な望みを抱かざるを得なかったという特種事情。いわば二重に足枷を嵌められていたようなものだが、このハンディキャップを超えるのは、どんな堅固な覚悟を以てしても容易ではなかったに違いない。本稿の云う「悲哀」とは、根本的にはそうした哀しさを指している。してみると、exileとなったのちの詩人の足跡とは、不可能なものを可能なものに換えようとして悶える悪戦苦闘以外のなにものでもないことになるだろう。そうした一種英雄的とも云えるふるまいに対して、はたして芸術はどんな救いの手を差し伸べてくれたのだろうか。

その真偽を確かめるのに便利なのは、先に挙げた詩集のうちの一冊 *A Simple Lust* (1973) だろう。この詩集は、三つのパートから成っており、もっとも初期の *Sirens Knuckles Boots* (1963) からはじめて、次の *Letters to Martha and Other Poems from a South African Prison* (1968) を経て、exile以後へと到る詩人の足取りを、主要作品を選びながらほぼ年代順に辿ってみせてくれる、じつによくできた作品選となっているからである。したがって、まずはこれを使いながら、詩人の変貌のさまを実地にみてゆくことにしよう。

5

詩集 *A Simple Lust* には、長短あわせて、100を超える作品が収められているが、このうちもっとも名が知られており、また、おそらくはもっとも優秀と認められるのは、第二詩集のタイトルにもなっている 'Letters to Martha' だろう。本篇18篇と 'Postscripts' 6篇から成るこの連作詩は、詩人が遺した作品のうち、もっとも規模の大きなものである。逮捕後ロベン・アイランドに送られ、その獄中、自身の正気を保つためにこそ必要だった詩作を、唯一書くことを許されていた手紙の形に託した。闘争に伴う、いわばどん底において作られた作品である。その意味では、逆説的に、(闘争の) 詩人としてはまさに頂点にいたとも云えるわけだが、とすれ

ば、一般にこれが最優秀の作品とみられるのも無理はないし、云い方を換えれば、詩人の人生で、詩と闘争がもっとも理想的な形で調和していた時期の作品と見做してもよいだろう。それが証拠に、exile となったのちのブルーナスが、詩作を通じて繰り返し恋焦がれるようにしたのは、この地獄=理想にほかならなかった。皮肉といえば皮肉な話だが、同時に exile での限り、それはけっして戻ることのできない場所でもあった。とするなら、そうした構図こそは、いっぽうで詩人の悲哀を過不足なく言い当てているとも云えるだろう。ようするに、そのように地獄を理想とせざるを得ない闘争の詩人の悲哀と、そこまで覚悟しながら永遠にそれからも排除されてしまうという exile の悲哀。先に指摘した二重の足枷の正体とは、じつはこの悲哀の二重性にほかならなかったのだが、まずは、‘Letters to Martha’ からである。

この作品が広く人の心を打つのは、なにより、語られている経験という経験が隅々まで直接なされたものだからである。詩といえば、たとえば、語の彫琢やイメージの洗練が云々されて当然だが、それにしただけで、それらを具体的な詩行において結晶させ根本から支えているのは、ごく単純な直接経験の集積にほかならない。くわえて、それら集積の焦点が絞れていればいるほどよい。そのほうが詩語やイメージの次元で輪郭がよりくっきりとするからである。詩においては、事実、この鮮明度がものを云う。たとえば、‘Letters to Martha’ の二番めの手紙に出てくる「釘」がそうである。このありふれた日用品が、獄中においては怖ろしい武器に変貌する。その紛れもない真実。両者の遠すぎる距離を埋めるのは、直接経験以外のなにものでもないが、そうだとすることを、「尻の穴」がいつも簡単に裏付けてみせてくれる。そのようにして結実するイメージ。痛みが身に滲みて感じられるような鮮明さはどうだろう。

and when these knives suddenly flash
 — produced perhaps from some disciplined anus —
 one grasps at once the steel-bright horror
 in the morning air
 and how soft and vulnerable is naked flesh

詩人は、苦もなく、人間性の深みに降りてゆく。あるいは、獄中の剥き出しの現実がそこへと詩人を引きずり込んでゆく。ここで云う現実とは、うへの引用が示すとおり、頗る肉体的なものであり、その代表が「男色」である。

“Blue champagne” they called him
 — the most popular “girl” in the place;
 so exciting perhaps, or satisfying:
 young certainly, with youthful curves
 — this was most highly prized.

And so he would sleep with several
 each night
 and the song once popular on the hit-parade

became his nickname.

By the time I saw him he was older
(George saw the evil in his face, he said)
and he had become that most perverse among
the perverted:
a “man” in the homosexual embrace
who once had been the “woman”.

少年が「少女」に变じ、「女」となったのち「男」になる。屈折に屈折を重ねるこの負の成長過程は、狂った獣のそれにほかならず、もはや人間のものと呼べないのはもちろんだが、怖ろしいことに、それがごく当たり前の日常として通用し、それどころか、権威のヒエラルキーすら構成する。権威ならば、当然、それにおもねる者も出てくるだろう。

Perhaps most terrible are those who beg for it,
who beg for sexual assault.

To what desperate limits are they driven
and what fierce agonies they have endured
that this, which they have resisted,
should seem to them preferable,
even desirable.

手紙は云う。

the other sought escape
in fainting fits and asthmas
and finally fled into insanity:

so great the pressures to enforce sodomy.

なら、詩人はいかにして、そうした人間性の剥奪から逃れたのか。むろん、手紙＝詩を書くことによってである。そうすることによって、狂気という狂気を記録という人間的な秩序のうちに捉え直す。しかも、この手紙＝詩という道具は、監獄のふ厚い壁をもともせず、外との交通を切り開く。記録は超一級の報告となり、闘争のネットワークと接続する。そのようにして報告されるのは、なにも負の現実ばかりではない。前を向く勇気、闘争ならではの発見。それらが美しい語の連なりとなって実を結ぶ。皮肉にも、ここでそれを保証するのは、監獄内を支配する肉体的権威にほかならない。たとえば、詩人は、口笛すら禁じられている支配の有り様を嘆くが、このことが、同囚との喜ばしい人間関係を築いてくれたりもする。

Surreptitious wisps of melody
Down the damp grey concrete corridors

Joy

ささやかさこそ、重要であり、あらゆる人間的意味を代表することをここで詩人は発見する。
ときにそれは、小鳥であり雲である。

With a small space of sky
cut off by walls
of bleak hostility
and pressed upon by hostile authority
the mind turns upwards
when it can -

小鳥たちが演じてみせる飛翔の不思議が、「心捉える思考と驚き」の対象となり、鳥に対してよく使われる「自由」の紋切り型が意味を持つものとして再発見される。あるいは、

and the graceful unimpeded motion of the clouds
- a kind of music, poetry, dance -
sends delicate rhythms trembling through the flesh
and fantasies course easily through the mind:
- where are they going
where will they dissolve
will they be seen by those at home
and whom will they delight?

最後の手紙では、ついに詩人は、「星」を捕まえる。大胆にも、鉄格子のあいだに手を突っ込み、部屋の灯のスイッチを消すと、急いで窓に駆け寄り、星々の輝きを、その美しさを目撃するが、この美の産みの親とは、すなわち、紛れもない闘争との接続である。それが証拠に、

But through my delight
thudded the anxious boots
and a warning barked
from the machine-gun post
on the catwalk.

And it is the brusque inquiry
and threat
that I remember of that night

rather than the stars.

美が野蛮と対峙する。いずれがより人間の名に値するか、述べるまでもないような形で対峙する。

6

釈放された詩人を待っていたのは、自宅軟禁というもうひとつの監獄だった。とって、文字どおりの監獄でない以上、詩作はまったくの自由である。にもかかわらず、結果を先取りして云えば、詩人の書く詩は、‘Letters to Martha’ が持っていた輝きを失くしてゆく。たしかに、‘Blood River Day’ や ‘Their Behaviour’ といった優秀な作品がないわけではない。が、それらにしたところで、‘Letters to Martha’ を芸術作品として根底から支えている、あの直接経験の裏付けは望めない。自宅軟禁とは、監獄よりは自由に違いないが、その自由が意味するものとは、無為以外のなにものでもなく、そして、もちろん、無為からはなにも生まれない。ゆえに、詩人は、スポーツを通じてアフリカーナの誇りを貶めた自らの闘争の成果を高らかに歌い上げ、さらなる打擲を約束するが、成果とは、どんな立派なものであれ、過去のものと呼ぶほかない。現在こそつねに問題化するべきものである。闘争の渦中に身を置かざりはそうである。それでなければ、Blood River Day を祝うアフリカーナとなら変わらないことになる。ならば、もうひとつの、さらなる打擲の約束にしたところで、悪くすれば、犬の遠吠えともなりかねない。結果、その末に追い詰められた先は、exile の道以外なくなる。けれども、同時に、少なくともその道を選ぶなら、さらなる打擲の約束は単なる犬の遠吠えではないようにすることができる。すなわち、exile となることによって開ける活動の国際舞台こそは、意図する打擲をもっとも有効に加え得る場所だったからである。なら、迷うことはない。けれども、あれほど愛してきた詩はどうなるのだろうか。もしも詩というものがどこまでも普遍のものであるならば、心配することはない、exile には exile の詩があるだろう。それを手に入れようと詩人は目論む。

かくて詩人は、1966年の8月、片道切符を手に南アフリカをあとにする。待っていたのは、国際的な名声と、その代償たる孤独、exile という新たな敵との格闘だった。その格闘の厳しさを知って驚いたのは、誰よりも詩人本人だったに違いない。変わるのは、国の内と外、ただそれだけのはずだった。にもかかわらず、現実の違いはどうだ。詩人は、exile となった直後から悪戦苦闘する。その証拠が二冊の詩集となって残っている。*Poems from Algiers* (1970) と *China Poems* (1975) の二冊がそれだが、前者は、もはや彷徨と呼んで差し支えないような、繰り返し行なわれる活動のための移動を歌った詩の集合体であり、後者に到っては、なにを血迷ったか、そのような移動の末に訪問した毛沢東の中国を無邪気にも礼讃する詩を集めたものである。いずれも試行錯誤の結果と留保することすらできないような出来栄だが、あえて詩人に同情して云うなら、そこまでアパルトヘイトという敵は強かったと云えば、少しは慰めになるだろうか。その意味では、詩人を exile の道へと追い込んだ国民党政権の政治的勝利と見做すべきだが、それに対して、詩人はけっして負けを認めようとはしなかった。そうした一種常人離れした頑固さから生まれたもの、それを次にみてゆこう。

7

なにはともあれ、国の内と外では事情がまったく異なるという当たり前の事実を認めることである。そのうえで、新たな詩的アイデンティティを確立する。度し難い消極性を根に持つ exile という立場だけでは、およそどのような積極的アイデンティティも構成し得ないからであるが、何事も口で云うは易し、じっさい、そうだとすることを多大な骨折りの末に詩人は発見する。そこで思い出すのは、ごく初期の次のような書き出しの作品である。

A troubadour, I traverse all my land
exploring all her wide-flung parts with zest
probing in motion sweeter far than rest
her secret thickets with an amorous hand:

自身を吟遊詩人に喩えたのは、西洋の詩に心酔する若き詩人の若気の至りとみるべきだろうが、ここに云う 'all my land' は、もはや南アフリカではなく、それよりは遙かに広大な世界を指すこととなった。とするなら、吟遊詩人という存在の定義のほうもかつてのそれではなくなる。それが証拠に、exile となったのち、詩人はこんなふうに歌っている。

I am the exile
am the wanderer
the troubadour
(whatever they say)

これに続く詩行が示しているとおおり、接続すべきは南アフリカ国内で戦われている闘争に相違ないが、この口調に滲む自信の無さが物語っているように、それも、はや不可能になってしまった。'the exile'、'the wanderer'、'the troubadour'。それらすべてであってどれでもない、あやふやなアイデンティティというわけだが、もしもそれが実情の反映なら、この半ば自棄糞ともみえる認識こそ重要である。結果、*Poems from Algiers* に収められた作品中、例外的に優秀な、次のような詩が生まれることにもなった。

And I am driftwood
on an Algerian beach
along a Mediterranean shore

and I am driftwood

Others may loll in their carnal pool
washed by tides of sensual content
in variable flow, by regulated plan

but I am driftwood

そのようにはじまるこの作品は、全 65 行にわたって続く、詩人にしては珍しい、長い詩である。全体に漂うのは、深い孤独と絶望的ともみえるやるせなさだが、再三繰り返される ‘I am driftwood’ という単純な詩句の持つ力は、並大抵のものではない。それを可能にしているのはなにかと云えば、ほかでもない、自身を見つめ尽くそうとする眼差しの強さにほかならない。そして、そうした姿勢の追求こそが、事実、exile 以後の詩人の第一の仕事となるべきものであった。ようするに、そうだということを、そうとは知らないまま、この早い時点ですでに詩人はみついていたわけだが、そうなる理由は、これもほかでもない、詩人の置かれていた状況がそんなにも酷しいものだったという一点に尽きるだろう。それからの脱出を、以後詩人は、そうした “I”（私）の探求を深化させることを通じて謀ろうとする。そして、そのことは、デニス・ブルータスをして詩人として再生させ、ひいては、逆説的に、本国内で繰り返される闘争との失われた紐帯を取り戻す結果に通じることになるのだが、それに進むまえに、もう少しだけ詩人の業績の全体を辿り直しておくことにしよう。

8

若書きの初期の詩のほうがより安定してみえるのは、自身が相手にしている読者が明確に認識できていたからである。じつに単純なことだが、これが現実には思ってもみない大問題になることは、exile 以後の詩人の右往左往ぶりをみれば、一目瞭然だろう。ようするに、exile となる以前と以後とでは、相手にする読者がすっかり変わってしまったということなのだが、にもかかわらず、詩人があくまでも相手にしたいと思ったのは、それまでと変わらず、南アフリカ国内の読者だった。この想いと事実の齟齬から、詩人の苦悩が生じる。日々闘争に身を投じそれに殉ずる者と、概ね平和に浴しつつその枠組みから詩を評価しようとする読者とは、じっさい、雲泥の差があると云ってよいだろう。詩人にすれば、まったく異なる作品の提出をいきなり求められたようなものだが、むろん、手の平を返したように新詩が紡げるわけもない。exile 以後、詩人が苦悩したわけだが、そうなるまえの安定した詩の例をひとつだけみておこう。

The sounds begin again;
the siren in the night
the thunder at the door
the shriek of nerves in pain

Then the keening crescendo
of faces split by pain
the wordless, endless wail
only the unfree know.

Importunate as rain
the wraiths exhale their woe

over the sirens, knuckles, boots;
my sounds begin again.

これで全行の短い詩だが、これを読んで詩行を自身の直接経験として読めない読者は皆無だったに違いない。それほど詩人と読者との関係は稠密だったわけだが、exile 以後、そうした関係は断たれてしまい、詩人はまったく新しい読者を相手にしなければならなくなる。その読者とは、いわば世界に散在するじつに掴みどころのない存在にほかならないが、それに対するに、詩人の保有していた武器はごくわずか、若き日に西洋の詩に慣れて培った実践のみだった。実質が慣れである以上、模倣の域を出ないのはもちろんだが、それを乗り越えるのに、詩人は、一種のアフリカ性を主張する。けれども、それではあまりにも迂遠すぎるだろう。云ってみれば、詩人の抱える苦悩とは、一般には理解され難い、極端に特種なものだった。exile とはなったが、その一種の報酬として世界的詩人という名声を勝ち得た。それでもなお不足だとしたら、たしかにそうである。残された道は、いっそ開き直って、誰にも理解されない方向へと遮二無二突き進むだけだが、だとしたら、そうした捨て身の開き直りと頑固さにより、詩人はどのような詩を書き得たのだろうか。

9

1978 年出版の *Stubborn Hope* をみてみよう。南アフリカ時代の詩及びその他詩集から取ったものとともに、exile 以後、*A Simple Lust* 未載の作品を集めた選集である。exile になって 12 年、めばしい変化や成長がみられて当然と思われる年月が経っているが、その兆候を以下で探ってみよう。

先に置き去りにした論旨に続けて云うなら、注目すべきは、詩集に含まれるグループのうち、最後に挙げた *A Simple Lust* 未載の作品群である。目次に付けられた註に従って数えれば、50 作強の詩から成る作品群である。そこにおいて、“I” (私) の探求がいかに行なわれているか、知りたいのはそれである。大雑把に数えるなら、50 作強の作品のうち、“I” (私) を歌っているのは、そのおよそ半分弱を占めている。数だけみれば、大した数には違いないが、そのうえで気づくのは、多くは短い詩であるという事実である。それゆえに未載とされたとも考えられるが、なら、断片的であることは、はたしてそのまま欠点となるのだろうか。とりわけ、詩人が *China Poems* を通じて短詩の可能性を積極的に追求したことを思えば、なおさらだが、このことと、“I” (私) の詩が多いこととは、けっして無縁ではないだろう。もっと言えば、“I” (私) を探求するがゆえに、詩は短くなった。そうなのかもしれない。短さ=断片的であることは、(多くは慣れである西洋流に従って) いったんは欠点と見做されもしたろうが、時を経てそうでなくなり、それどころか、ある種の突破口を意味する重要性を持つまでになった。ゆえに、あえて短い詩に注目して詩集を編んだということなのだが、そうした短さと “I” (私) の探求との関係、あるいは、それが詩人にとっての突破口となる所以については、具体的に現実の詩が教えてくれる。

たとえば、開き直りの詩のひとつは次のようにはじまる。

I come and go

a pilgrim
grubbily unkempt
stubbornly cheerful
defiantly whistling hope
and grubbing for crumbs of success
out of all near-defeats

断片的な詩の全行は、たとえば、次のような短さである。

Again and in another way I triumph
simply by this trust in their awareness
through the guard of distance
the cloak of space
the complex riverlock of circumstance
that impedes the flow of knowledge
and of facts

そして、“I”（私）の探求は、たとえば、次のような詩から読み取ることができるだろう。

What am I in her eyes?
half-white, half-black—
chiefly half-white:
for her, with her own hang-ups,
coursers of darker hue,
mine is an alien image
a mixed ambivalent viscid thing
repellent; ambiguous,
in a less-hostile no-mans-land:
I am a puzzle, an irritant,
part-envied escaper, part pitied.

かくて詩人は、たとえば、次のような境地へと到る。

With my customary restraint
customary control
customary discretion
customary sagacity
customary wisdom
I will be silent:
knowing he is capable of spite

knowing he can do harm
damage
can injure the cause
I will be silent
and exercise my customary virtue:
but it is a virtue I am doubtful of
am suspicious of
am sometimes contemptuous of:
Yet I will be silent
and perhaps applaud myself.

闘争に身を投じる者からすれば、“I”よりは“we”のほうが主語として適切であるのは、改めて云うまでもないが、そうした主語が成り立たなくなった者にとっては、“I”で貫き通すよりほか選択の余地がない。とはいうものの、そうした後退が即座に敗北を意味しないことは、うえのどの引用にも弱気な姿勢や消極的な態度が少しも認められないことからみても、明白と云えるだろう。孤立無援の自分自身が無力であることに変わりはないとしても、そうした孤立を自ら進んで貫き通そうとする者にとっては、状況が、ある意味上下転倒した異相を呈することになる。かくて、exileであることをむしろ積極的に受け入れた詩人は、容易には帰国しないという、想いとは逆の決心すら腹に固めることにもなる。その意味からすれば、最後に引用した詩で繰り返される“I will be silent”という詩句も、そうならざるを得ないといった消極性とは関係なしに、むしろ「誰が口を利いてやるものか」といった不敵な挑戦として読まれるべきだろう。それでこそ、最後の行の“and perhaps applaud myself”という詩行も生きてくる。断片は、断片のまま受け入れられるべき価値を持ち、また、捨て身の開き直りがまっすぐ道を切り開いてゆくことにもなるだろう。

だとしたら、もはや詩人は、闘争からすらも自由である。それでいて、(あるいは、それゆえにこそ)、それとの絆を堅くすることができるという、頼もしい逆説も成り立つ。それが証拠に、詩人は、少しも臆することなく、次のように歌うこともできたのである。

Here, of the things I mark
I note a recurring hunger for the sun

—but this is not homesickness,
the exile’s patriate thirst:

At home, in prison, under house-arrest
the self-same *smagting** bit me

now is the same as then
and here I live as if still there.

*Afrikaans for *yearning*

活動家としてのブルータスが、exile となって以降、本領を發揮し獅子奮迅の働きを示したことは、先に述べたとおりだが、その所為で、詩作に多くの時間が割けなかったというのは、否定できない事実である。心の底から詩を愛する詩人であることを思えば、哀しい仕儀には違いないが、すべてを犠牲にする闘争のまえにあっては、致し方ない。‘Letters to Martha’ のような幸せな例は、じっさい、稀有と云うべきなのだろうが、そうしたなか、ひとつだけ例外がないわけではなかった。すなわち、同志の死を悼んで歌われた詩、いわゆる追悼詩がそれである。A *Simple Lust* でいえば、アルバート・ルツーリの死を悼む ‘For Chief’、*Stubborn Hope* でいえば、イマーム・アブドラ・ハルーンに捧げた ‘In Memoriam: I.A.H.’ といった作品である。ようするに、公的という詩の性格が、exile であるか否かを無化する。イギリスの桂冠詩人、あるいは、帝国主義におけるキプリングに相当するような特種な公的さを認められた詩人。事実、うえに挙げた詩を読めば解かるように、詩人はそうした公的さを我が物とし得る才能に恵まれていたようにも思えるが、哀しいかな、この役割は、けっして臨時の域を出ることはなかった。活動家としての詩人を支えた抜群の実務能力がこの点邪魔をしたといえ、省略のしすぎになるかもしれないが、けっして外れてはいないだろう。でなければ、活動家としての成功は到底望めなかったに違いないからである。

そうした詩人のいわば「公的詩」の才能を示す例としては、追悼詩以外にも挙げることができる。タイトルを（無題の場合は最初の行をそれに代えて）列挙すれば、1962年の Sabotage Bill に反対してジョハネスバーグで黒人と白人がぶつかった事件を扱う “The mob”、1967年の Freedom Day を祝う “Today in prison”、exile となったのち、あの悲劇を忘れるなど叫ぶ “Sharpeville”、あるいは、詩人にとっては仇も同然のフォルスターの辞職を詩にした “Poems for Vorster’s resignation”、そして、ソウェト蜂起を21世紀になってから取り上げ直した “Remembering June 16, 1976” 等である。類似をさらに広げてよいなら、いずれもロベン・アイランドでの経験を歌った “Robben Island sequence” や “On the island”、Group Areas Act の結果強制撤去させられた South End を歌う “For them Burness Street is a familiar entity” やソウェトの街を歌う短い詩 “In the dark lanes of Soweto” といった作品も、同様の分類に入れておかしくない響きを持っている。そのようにしてみると、デニス・ブルータスという詩人の本質とは、じつは、桂冠詩人をその代表とするような公的詩人のそれではなかったのかと、正直疑いたくもなるが、その意味では、詩人が若い日に「吟遊詩人 (troubadour)」に憧れたのは、大きな誤解だったのではないかとも思われてくる。もしもそのような憧憬を持たなかったら、exile の悲哀に身を浸すこともなく、“we” を主語にする詩を南アフリカ国内で営々と歌い続けてゆくこともできただろう。デニス・ブルータスをめぐる「悲哀」とは、そのようにみることもできるように思われる。

最後に、本稿では取り上げるのでできなかった詩について、少しだけ触れておきたい。ひとつは、*Stubborn Hope* 収載の “Swatches of brassy music” といった作品である。この詩も、ロベン・アイランドでの経験が基になっているように読めるが、うえに挙げた “Robben Island sequence” や “On the island” といった作品とは異なり、趣としてははるかに内面的に豊かである。夜間の意識の流れを追うことで、詩人は存在それ自体に肉薄しようと試みる。その態度に闘争的な色合いは薄い、それでいて、問いかけるものの意味は重い。詩人にしては、めず

らしい部類に属する作品と云えるが、exile の悲哀の犠牲になることがなかったなら、そのような方向にこそ、詩人の詩は伸びてゆくことができたのかもしれない。それを思えば、なんとももったいない話だが、そうした色眼鏡をかけて、個々の作品を読み直してゆくなら、詩人の全作品を通じて、本稿で論じた豊かさとは別のそれを味わうことも可能なのかもしれない。

* 本稿において使用したテキストは下記のとおりである。

Dennis Brutus, *A Simple Lust* (Heinemann, 1973)

-----, *Stubborn Hope* (Heinemann, 1975)

Lee Sustar & Aisha Karim eds, *Poetry & Protest: A Dennis Brutus Reader* (Haymarket, 2006)